
嘘つき世界と二人と絵本

武知美海

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

嘘つき世界と二人と絵本

【Nコード】

N7514Y

【作者名】

武知美海

【あらすじ】

世界を嘘でできた絵本だと称する、妹の形見である絵本を大切にしている少年、泉。
世界の嘘は幸せであり、その幸せに隠された嘘を隠すために、人は幸せを使うのだと。

そんな泉の持論に、ひとつ書き足した傷だらけの少女。
イギリスのクォーターであり、隣に住むエリー。

不器用な少年と、積極的な少女の物語。
絵本のような嘘だらけの世界のなかで、
本当の幸せを見つける物語。

エリーのペース（前書き）

これは恋愛小説です。

時々、ギャグテイストだったり、残酷な描写があり得るかも知れませんが、そういう描写が苦手な方は、止むことをお勧めしません。

エリーのペース

僕は絵本が大好きだった。

メルヘンで、夢があつて、それでいて、いつだって僕たちを楽しませてくれた。

僕には妹がいた。

僕より二つ年下で、幼かった僕たちはいつだって二人で絵本の世界に入り込んで、そのメルヘンな世界に夢を馳せていた。

でも。

そんな幸せな世界は、呆気なく、破れ去った。

まるで、ハサミで切り取られるように。

まるで、水でふやけた藁半紙のように。

妹は、あっけなく、僕の前から消えていった。

手からこぼれ落ちる真砂のごとく、さらさらと、風に舞うように。

絵本の世界はすばらしい。

だって、嘘でできているのだから。

そんな嘘が、大好きだった僕は絵本を抱いて泣いた。

もう、可愛かった妹と絵本を読むことは叶わない。

そのときの僕にはどうして妹が死んでしまったのかなんて、分からなかった。

いや、聞かされなかったのだ。

そのときの僕はまだ六歳。

まさか、妹が【殺された】だなんて、言われても理解なんて出来ないだろうから。

けど、今は違う。あれからすでに十一年が経過して、僕は十七歳になり、ごくごく普通の高校生として生活している。

妹が実は殺されていて、犯人は捕まって今は刑務所だとも、親からは聞かされた。

僕の思い描いていたモノログでは、さぞかし犯人が憎いだろうと、感じるのかもわからないけれど、それは違う。

結局は、この世にある幸せなんてものは、全て絵本と同じなのだと、思い知らされたただけなのだから。

そう。

全ては優しく彩られた、【嘘】という絵本の世界。

そう考えれば合点がいくというものだ。

だから僕たちは有り合わせの幸せをやりくりして、今ある幸せに隠れている嘘を隠すのだ。

それはいつか破綻すると、本能的にわかっているけど、理性をもち、文明的な生活に悦を覚えた人間にはそれから逃れる術は、ない。

それは僕自信もご多分に漏れることなく、きつちりとパーツとして収まっているのだ。

だからと言ってなんだというのか。

そういわざるを得ないくらいに、この考えかたは破綻して、破綻し尽くされている。

だって、僕は妹が殺されていたと知っても、結局は有り合わせの幸せで幸福なのだから。

誰しもがそうとは思われないけれど、少なくとも、僕自身はそうなのだと、自信をもって言える。

仕方ないことだろう。

人の記憶とは薄れていくものであり、妹がいたという事実はすでに十一年前のことで、僕にとっては過去。過去とはすなわち、過ぎ去った時間。

あるいは。

なかったこと。

なぜなかったことになるのか。

なにせ、記憶は薄れるのだから、どうしたって子供の頃とは違う僕にしてみれば、妹がいて、その妹が殺されたからといって、それを憤慨するまでの記憶は持ち合わせていないのだから。

薄情な人間だと、個人でも納得に足る冷血ぶりだろう。

けど、漫画や小説なんかで見かける復讐を、当時四歳だった妹が願うのだろうか。

靈魂の存在を認めるとしても、だ。

死んだそのときに人の時間は停止するのだから、そんなこと望むだけの知識があるのか。

いや、無かったとしても、恨み辛みはあるだろうが。

けど、僕は復讐をするつもりはない。

だって、意味ないから。

犯人は捕まって服役中。

裁判だって余罪もあってか重い刑だって聞いた。

だったら、それが裁きた。

僕が介入することじゃない。

けど……ひとつだけ。

ひとつだけ、妹が僕に残してくれたものがある。

絵本だ。

嘘で構成された、メルヘンで、キレイで、すばらしい世界。

僕の大好きだった世界。

今は、やはり年が年だからなのだろうか、絵本を読もうとは思わなくなった。

ただ一人、ある少女を除いて。

その少女は、日本人なのだけれど、異人の血を受け継いでいる銀髪の長髪を風になびかせた、長身痩躯で眉目秀麗な典型的な美少女。性格は人懐こく、感情表現はとても豊かだけれど、時々感情が暴走して泣くこともある。

そして、若干だけれど妄想癖があり、何かの拍子にスイッチが入る。名前はエリーⅡ羽犬塚Ⅱグッドマン。

僕のクラスメイトで、中学二年生の頃からのお隣さんでもある。

彼女は僕の絵本が好きだ。

よく僕に絵本の読み聞かせをせがんでくる。

そこまではまだいい。

ただ、最近では僕に絵本を【作れ】と要求してきている。

そんなむちゃくちゃなと思う。

何しろ、僕には絵心がない。

もし猫なんかを描こうものなら、牛と言われる始末だ。

ちなみに僕の描いた猫を牛だと言ったのはエリー本人だ。

「ジャックー！」

「エリー、僕はジャックじゃない。僕は日本人。山中泉って名前があるから」

ちなみにジャックとはエリーが僕につけたあだ名のようなもの。

愛称として呼ばれることすら願ひ下げの名前だ。

「ごめんごめん。だって最近、泉ったら冷たいんだもん」

頬を膨らませながら、如何にも不機嫌ですよ。と、訴えてくるエリィ。

けど、僕が彼女に冷たくする理由はあったりするが、これがまた実に情けない。

「泉が冷たいのは当たり前だよ。温かかったら温泉だ」

なんて軽口を返しながらお茶を濁そうとするのだけれど、そんなものが自由奔放な人柄に定評のあるエリィに通用するはずもなく。

「冷たいなら泳ぐし、温かいなら浸かるわよ。なんで避けるの？家では普通にしてるのに」

「エリィ、君は少し自分の容姿を意識してよ。僕は特徴のない、ただの男子。君は構内で一番と言われるほどの美人。そんなのが一緒に歩いてみなよ？どれだけ嫌な視線浴びるか分かったもんじゃない。ただでさえ家が隣ってだけで変ないちゃもんつけられてるのにさ」

つい本音を漏らしてしまう。

が、この事に僕に比はないだろう。

学校のアイドルと一緒にいって恨み買うよりは遥かに居心地がいい。僕は平穩無事が好きなのだ。

「私の容姿なんて関係ないじゃん。私は好きで泉にいるのに、泉は私というのは嫌なの？」

「そういう訳じゃないよ。ただ、僕は平穩無事が好きなんだ。君の好きな漫画みたいな、学校のアイドルと懇ろになって全校の男を敵に回すみたいな展開はごめん被りたい」

「そんなの堂々としてればいいじゃない。ビクビクしてるから変に恨み買うのよ。お隣さんで仲が良いのは当たり前なんだから」

それはまあ、そうなのだろうけれど。

都会ならいざ知らず、ここは片田舎の地方都市。

田畑はあちこちにあるし、昔ながらの家屋に施設もある。

僕の家も田畑の真ん中であって、エリーの家もその隣。

近所の世帯数もそんなものだから、必然的に仲違いになるようなことは滅多なことではなり得ない。

エリーと初めて会ったときも、普通に対応していたし。
やはり意識しすぎなのだろうか。

「それに、特徴ないとか泉は言ってるけど、泉ってイケメンだから地味に女子と一部の男子の人気高いよ？」

「一部の男子ってなに!？」

怖いことを聞いてしまった。

僕の平穩な生活が、学園ライフが破綻していく。
どうしてこんなことに。

「ところでさ、返事まだ？」

「え?...えーと、まだ、先じゃダメかな？」

ちなみにエリーの言う返事とは、僕にたいしての告白であり、エリ

「はその返事を待っているという状況である。けど、冷静に考えても見てもらいたい。僕の言ったことを思い返してほしい。」

でも、そんなことはお構いなしなのがこのエリーという女の子なのだ。

性格は面倒見がいいし、勉強だってそこそこ。スポーツは万能で、料理も得意なのだ。

ただ、無茶ぶりしたりやたらめったらな甘えたりだったりとも目立つが。

「私、本気なんだけど。私だからいいけど、あまり女の子を待たせるものじゃないわよ？」

「分かってるんだけど…。僕だって、その…エリーのこと、好きだけど。でも、やっぱりそんな簡単に決められないよ」

「はあー、わかってはいたんだけどね。毎度思うけど、どうして私、泉のこと好きなんだろ？」

それを僕に聞かれても反応に困るし、地味にダメージ受けるからね。でもその頬はまた膨らみ、色は白みの肌色から桃色の指す肌へと変わった。

照れていることは歴然と言った様子で、純粹に彼女は僕のことを想ってくれている。

ふと、絵本のことを思い浮かべる。

【世界そのものは嘘で作られた絵本そのもの】という、僕の持論。これは、本当によくわからない持論だけれど、有り合わせの幸せを

補填することができるのなら、どうできるのだろう。

エリーの想いを受け入れることが、僕たちにとっての幸せなのだろうか。

それとも…それも、偽物だろうか。

「またお得意の世界は絵本の持論？」

「え？あ、ごめん。また、顔に出てた？」

「だったらそんな持論に書き足してあげる。【どうせ偽物なら、壊れるまでは本物である】ってね」

どういう意味なのだろう。

その意味を聞いてみても、エリーはただ、

「ひ・み・つ」

と、はぐらかしてしまう。

本当に自由な女の子だ。

なら、いっそ意味がわかるまでエリーに振り回されてみようと思う。

「わかった。僕の負けだよ。付き合おう、エリー」

屋根づたいの距離

エリーの告白を受け入れたのは、ついぞ昨日のこと。

そのあと歓喜の余りに泣いてしまったエリーに抱きつかれた上に、近くを通ったクラスメイトにその光景を目撃されてしまったものだから、休み明けの学校が憂鬱で仕方ない。

けれども、まあ。

悪い気分ではない。

僕だって、健全な男なのだ。

エリーのように愛らしく、気心の知れた少女に告白されて、嬉しくないわけもなく、エリーの想いが更にはどの程度のものなのかはわからないけれど、僕だって彼女のことが好きなのだ。

だから、今はとても気分がいい。

今日は土曜日で、特に進学校なんかではない高校に通う僕とエリーは休みであり、今、僕は自宅の二階にある六畳の洋室である自室にて、宿題を片付けている最中である。

恐らく彼女もそうしていることだろう。

元々僕はこのように休みの始めに宿題なんかするようなマメな性格ではないのだけれど、エリーの要望でこうすることになっている。

エリーは勉強に関してそれなりに真面目に取り組んでいて、宿題のような面倒なものを先に片付けてから予習してしまうらしい。

それからは僕の家で過ごしたりしているのだけれど、そのときに僕が宿題なんかして遊ぶ時間が減ることが嫌だと、僕にこのような要望を申し付けた。

ちなみにエリーとの交際が始まったとは言えど、僕たちのスタンスには余りに変わりはなく、と言うよりも、変わりようがない。

恐らくは手を繋いだり、一緒に出掛けたりする機会は増えるのだろうけれど、急いて関係を発展させる必要性を感じるような歳でもなく、今までのように友達のようなご近所さんといった付き合いかたになるだろう。

そんなことを考えながら宿題にいそしんでいると、いつのまにか宿題は片付いてしまい、僕はとりあえずとばかりに机を片付けて、床に放置していたゲーム雑誌を棚に戻した。それからゴミ箱の中のゴミを片付けて、簡単に掃除機をかけておいた。

どうせこれからエリーはやって来るのだから、部屋を片付けておくに越したことはない。

彼女は潔癖とも言えるほどにきれい好きで、ゴミが散らかっていたりすると、怒って一日不機嫌ということもある。

コンコン、と、窓をノックする音。

僕は窓の鍵を開けて、窓を開け放ち、一言。

「玄関があるんだから、そっちから来てよ」

「えー。こっちのが近いからいいじゃん」

エリーは屋根づたいに窓から窓へと移動して僕の部屋へと訪れる。我が家についている玄関とインターホンは来客の少ない我が家では、家人とエリーの家である羽犬塚家の人のためにあるといっても過言ではなくなっている。

エリーは窓に腰かけると穿いていたソックスを脱いで、丸めてから自分の部屋へと投げ込んだ。

他人の部屋には汚れたものを持ち込まないと決めているそうで、基本的には室内では裸足になり、帰るときに再び予備で持ってきているソックスを穿くという徹底ぶり。

だから彼女のいつも持っている鞆のなかには予備のソックスや着替えが入っている。

制服のブラウスにしたって、普通なら二、三着程度で事足りるそうなのだけれど、エリーは午前と午後で着替えるため、七着持っているそう。

本人もこの行きすぎた潔癖なところは悪癖として認識しており、今は直す努力をしているようだ。

「それから、毎回言ってるけど、どうして僕の部屋に来るときはそんなに薄着なの？露出高すぎだよ。目の毒だよ。下着とか見えてるんだから、少しは気を付けてよ」

彼女の部屋着はともラフ過ぎて、ただでさえスレンダーでスタイルがいいのに、それを惜しげもせず晒すような薄着をしている。

今日だってキャミソールとホットパンツで、長い髪をサイドアップにまとめあげているだけ。

僕は慣れてしまっただぎまぎすることはないのだけれど、普通に考えてもこれは恥ずかしいだろう。

「私、長袖とか苦手なの。前にも言ったじゃない。それに、下着と水着の区別だって曖昧な私よ？今さら過ぎ」

「水着つて、まあ、たしかに曖昧かもしれないけど。それでも責めて胸元隠すとかはしてよ。この間、従姉さんに見られて説教されたっていうのに」

「あー、それは本当にごめん。うーん…ならタートルネックにするよ。サマーセーターならノースリーブあるし」

そうしてもらえると大変、助かる。

それにさっきも言ったけれど僕だって健全な男子。

こんな挑発的とも取れる格好を見せつけられていつバカなことをしでかすかなんて、分からないのだから。

いくら慣れてしまったとはいってもだ。

そうならないとは言い切れないのだから、自重してもらいたいものだ。

「まあ、今日まで我慢して」

と、部屋の中へと入りながらそうつぶやいた。

けどまあ、今日は例の説教された従姉さんはいないから、大丈夫だろう。

母さんも父さんも、エリーのことは知ってるし。

「あー、お部屋の掃除したら疲れたー…」

「お疲れ様。僕の部屋はそんなに綺麗じゃないよ」

「泉にそんなこと求めてないわよ。私が気にしちゃわないくらいでいいの。それとも、お部屋、私が掃除していいの？」

それは勘弁願いたい。

なにせ、部屋のあちこちに隠された思春期の聖書がちらほらとあるのだから。

そんなものを見つけれでもしたら、明日の我が身に首は無し。家族会議は確定的で、更には従姉さんにも叱られてしまっだろう。

「別に泉がエッチな本持つてても怒らないけど？興味あるのが普通なんだし、無かったらホモとか疑うわよ？」

そんな慈愛に満ちた目で僕を見ないでいただきたい。
あと、発想が極端すぎる。

そういうことに興味はあるけど、そういう本とかは嫌いっていう男子はいるんだから。

「私の性格的に泉がそういうことを望んでも、たぶん無理なんだし、自分で処理して貰わないとね」

「そういうことってさらっと言うことじゃないからね…」

「相変わらず下ネタに弱いなあ。顔真っ赤じゃん」

僕は別に普通だと思うのだけれど。

エリーがやたらと下半身ネタについだけだろう。

エリーは普通と少しずれた羞恥心を持っていて、例えば、風にあおられてスカートがまくれ上がっても意にも介さないのに、髪を撫でられたりすると異様に恥ずかしがったりするのだ。

と、僕はとりあえずエリーの髪を撫でておくことにした。

うん、きれい好きのエリーらしく、しっかりと手入れの行き届いた美しい髪で、さわり心地は極上の一言につきる。

「あ、い、泉、恥ずかしいからやめて…」

と、本当に恥ずかしそうに身を屈めてしまった。

けど、止めてやるつもりはなくて、僕は私物としてエリーが置いてある櫛を取り出して、上手くはないけれど彼女の髪をすく。

エリーの顔はリンゴのように真っ赤になり、なんとも可愛らしい反応を返してくれる。

けど、ここでふと、ひとつの疑問が浮かんだ。

潔癖な人というのは、体、特に髪なんかには人が触れることを嫌がると聞いたことがあるのだけれど、どうしてエリーは嫌がらないのだろうか。

結構な頻度で僕は撫で付けていたりするのに。

「泉だからよ。他だったら…殴ってる」

「彼氏特権ってやつなの？」

「…というか、彼氏じゃなくても泉だから、許してるの。恥ずかしいのも我慢してるのよ。好きだから…触ってほしいの」

「なんというか……僕の方が恥ずかしくなってきたよ」

「私はもつと恥ずかしいの！……ねえ、今は幸せなの？」

少しだけ影を落とすような、そんな寂しそうな表情をするエリー。それは僕を感じている幸せを偽物だと、僕が思っているからなのかもしれないから。

そんな影の薄化粧を見てもなお、僕は答えを返せない。

どうしてなのだろうか。

たしかに、エリーのことが好きで、こうして一緒にいると満たされるけれど。

それでも、それは嘘つきな、絵本のような世界だからかも、と。心のどこかで感じてしまっているからなのかもしれないから。

「…私が、本当の幸せを教えてあげるから。少なくとも、私はすごく幸せだもん。この幸せが…偽物のはずがないもん。…嘘なわけ、ない」

僕へと体を翻して、ぎゅっと僕を抱き締めた。

紺碧の瞳からは涙が溢れて、僕が本気で彼女との恋愛を楽しめないことを、真剣に心配してくれた。

交際している張本人が、心配してくれるのだ。

それはとてもありがたいことで、とても幸福なことなのだろう。

「ありがとう、エリー」

僕はそっと、彼女の細い体を抱き締めた。

ガチャっ。

そんな音になり、この部屋の時間が一瞬だけ停止した。

「やつぽー、泉い…って、何してるの、あんたら」

従姉さんだった。

おかしい、たしか今日は彼氏さんとのデートで来ないはずだったはずの従姉さんが、どうしているのだろうか。

「……えーと…実は僕たち付き合ってた…」

「…ふーん。それはまあ、やっとかって感じだけれど。お姉さん、そういうのはまだ早いなって思うんだよなー。エリーちゃん、泣いてるけど、なにをしたのかな？お姉さんにちゃんと説明してほしいんだけどなー」

まずい。

顔は笑っているけれど、目が笑っていない。

ちなみに従姉さんは警察官で、性犯罪の捜査官でもあるため、こういった誤解はとにかくまずい。

誤解ではあるけれど、この抱き合っている体勢に、泣きじゃくるエリー。

うん、弁解しようにも潰されている。

「…ぐす、お姉さん、誤解。…私が、勝手に泣いただけ。私、気持ちのコントロールがへたくそだから」

エリーがフォローしてくれる。

「エリーちゃん、そんなに庇う必要はないんだよ？ほら、何されたか聞いてごらん？」

「だから、私はなにもされてない！泉は私にひどいことなんてしたことない！いつもみたいに私の薄着を注意して、呆れてたんだから！…それに…たしかに何かされたら怖いかもしれないけど、泉なら許せるもん。そのくらい好きなんだもん。お姉さん、警察官だから疑うのは仕方ないも知れないけど、泉は私にひどいことしてないもん。優しいもん。ぎゅっとしてくれたんだから」

涙声で涙と鼻水で顔を汚しながらも、必死に僕のフォローをしてくれている。

従姉さんの疑り深さも病的ではあるにせよ、職業上仕方ない部分もあるから、いつもは従姉さんが落ち着いてから説明している。

でも、そんなことは百も承知のはずのエリーは感情のコントロールが決壊し、とにかく僕は悪くないと訴えている。

なんていうか、かなり痛々しいまでに愛されていると感じた。

「ごめんね。泉も、エリーちゃんを大切にしなきゃダメよ?」

「うん。ほら、エリー。ぼくは大丈夫だから」

「うん。……うえ…顔汚い。洗面所借りるね」

エリーは部屋を出て洗面所へと赴き、僕はひとつため息をついたあと、エリーの涙と鼻水が付着した服を脱いで、着替えた。

エリーが帰ってきてから付着したものを着ていたら怒られてしまうし。

従姉さんが口を開く。

「あのさ…さっきの、ごめんね」

「ううん。気にしないで。エリーのこと心配してたんだからさ」

「うん、まあ…ね。でも、やり過ぎたよ」

「これからおいおい直せばいいよ」

「まさかエリーちゃんがあんなにあんたにベタ惚れなんてね」

苦笑い。

けど、たしかに、今のフォローには驚くばかりだ。

そんなにまで、僕を好きなんだと嫌というほど感じたけれど、それでもやはり、エリーに好きだと言われて嬉しい僕がいる。

これは、これだけは嘘だとは…思いたくない。

――

そんなやり取りから、少し時間がたち、頃合いはお昼も十二時でお昼時だ。

さて、今日は母さんはぐーたらするとか言っていたから僕が作る他ないのだけれど、なかなかどうして僕は料理が苦手だ。

昔、包丁で指を傷つけて以来、怖いのだ。

「インスタントラーメンでいいかな。エリーはなにか食べたいものある？」

女の子らしく甘いもの好きで、かつ味にうるさいエリーは不思議なことにラーメンが好きだ。

ラーメンのスープが跳ねて服につくからと、普段は食べないらしいのだけれど、僕が作るさいには一緒に食べたりする。

そのときは僕のタンスから勝手にジャージを取り出して着用して、スープから衣服をガードしてたりする。

男性もので大きめのジャージを細身のエリーが着ればどうなるか、そんなことは想像しなくてもわかる通り、かなり袖や裾がぶかぶかだ。

それが大人びて見えるはずのエリーを幼く見せるので、いつもと違う彼女にどきまぎしてしまったりもする。

「なんだったら、私作るけど？」

「いや、台所は明日掃除だから散らかってるんだけど」

ちなみに油污れとかであるが。

我が家は一週間に一回、日曜日に台所のシンクやガスレンジを掃除している。

包丁やまな板は毎日使う前に消毒こそしているものの、やはり水回りは綺麗にするべきだとして、母さんが取り決め、家族で行う行事となっている。

「それは分かってるから大丈夫。材料は何があるの？」

僕は床下に設置されている収納や冷蔵庫の野菜室を覗いて伝えた。

「ニンジン、タマネギ、ジャガイモ、バター、ニンニク、豚肉、鶏肉…だね。調味料は一昨日一緒に買いにいったるし、分かるよね？」

「それ、カレーでいいじゃん」

たしかに。

何を作るなんて悩む必要もなく、カレーの材料しかないとと言える。ポークカレーかチキンカレーかは僕とエリーは真逆の好みなので少し考えるけれど。

「じゃ、チキンカレーで」

「いや、ポークカレーでしょ」

やっぱり別れた。

僕は豚肉が好きなのだけれど、彼女は鶏肉が好きなのだ。

僕は個人的に唐揚げみたいにしてあれば鶏肉は好きなのだけれども、カレーなんかにはいるとどうしても鶏肉はパサついて食べづらいのだ。

「…じゃ、今日は豚肉」

あれ？今日はあっさりといいた。

いつもなら僕がおれるのに、珍しいこともあったものだ。

心的外傷―PTSD―

「ね、キスしよっか」

お昼にエリー特製のポークカレーを食べてから、二時間あまり。自室でくつろいでいると、唐突にエリーがそんなことを口にした。

「急にどうしたの？」

「え？好きな人とキスしたいのって、当たり前じゃないの？」

いや…まあ。

普通に考えるとそうなのだろうけれど。

けど、エリーの行きすぎた潔癖を考えるに、例え僕でもそういうのは無理なんじゃないのかと、思ってしまう。

自分の体液である涙や鼻水にすらも激しく嫌悪するのに、他人とキスだなんて。

ことを急ぐ気はないし、エリーだって辛いのではないのか？
それとも、髪同様に彼氏特権というものののだろうか。

「トラウマ解消できてるか、知りたいの。試すよって悪いけど…私にキスして。そしたら、私のトラウマを教えるから」

その言葉は力強く、覚悟を決めたかのような、強い意思をも感じさせた。

「ごめんね、こんなことって。泉とキスしたいのは本心。でも、

トラウマがあるかぎり、それを喜べないから」

エリーはそういうと、そつと体を寄せてきた。

エリーはこういつている。

でも、僕はどうなのだろうか。

たしかに僕も彼女とのキスはしてみたいとおもっけど。

それも、やはり。

やはり、偽物としか、嘘だとしか感じ取れないのだろうか。

「……やっぱり、こういうのは嫌よね」

エリーが少し、落ち込んだ表情を見せた瞬間に覚悟が決まった。

僕は彼女の細い肩を抱き込むとそつと、できるだけ優しくキスをした。

それから数秒。

僕はエリーの薄い唇から離れた。

「……エリー？」

エリーは涙を流していた。

そして、なにかに怯えるかのように、身を抱き、震えだす。

「だ…大丈夫。大丈夫だから。…約束、だから。話す…ね？ 泉には隠し事したくないから。…話すね」

「……うん」

僕はそつと彼女の肩をだく力を弱めた。

そうすると、エリーの震えは、少しだけ修まった。

「…………私ね、こつちにきたのはね。昔住んでた街で……塾から帰るときに、変な人に車に連れ込まれたの。それで……乱暴されたの……。怖かった。痛かった。色んな所に嫌なのが触れて、あちこちに触られて……」

……それは、つまり。

強姦されたということらしかった。

けどこれで、エリーの行きすぎた潔癖の真実が、見えた。

心的外傷。

PTSD。

トラウマ。

エリーは乱暴されたときに付着した相手の体液が未だに落ちない錯覚に陥っていて、彼女が自分の体液すらも嫌がるのはその延長。

薄着だって、トラウマを晒すことで、人から見られることで、その事実を自らには写さないようにした。

「ごめんね……。嫌だよ、こんな、すでに汚されてる体なんて。欲しくないよね。いくらお風呂で洗っても、落ちないんだよ。こんなの、泉がさわったら、汚れちゃうよ。抱き締めてくれるのは嬉しいけど……泉に付いちゃうよ……」

泣きじゃくりながら、僕に過去にあった出来事を教えてくれた。

「大丈夫だよ。エリーが汚れてるなんて、どこが汚れてるの？こんなにきれいな肌してる。僕は女じゃないから君の辛さを共有してあげられないけれど……。それでもさ、君が好きなんだ。エリーだって本当は男なんて、本当は怖くて仕方がないのに僕に告白してくれた。僕に恋してくれたんだ。だったら、君のそのトラウマが消えるまで待つから。僕は君に返事を待たせたから。今度は、僕が待っててあ

げるから。ずっと、ずっと」

それは紛れもなく僕の本心だ。

彼女の過去を知ってもなお、僕は彼女と過ごしたいと思った。

それは決して嘘でも偽物でもない、思えるたしかなものだった。

「いいの？高校、卒業するかもだよ？」

「いい」

「おばさんになっちゃうかもしれないのに？」

「構わないよ」

「おばあちゃんになっても？」

「君が大丈夫になるまで、待つから。僕が君を守るから。だから…
今度は僕から。…エリー。僕と、付き合ってくれないか」

かなりめちゃくちゃだし、格好もつかないけれど。

僕はありったけの想いをエリーに届けるために告白した。
すでに恋人である、少女に、愛の告白を。

「うん。うん。ありがとう。泉、待っててね。私、頑張るから。ち
よっとずつだけれど、私のこと、あげられるように、頑張るから…」

本当に今日のエリーは感情のコントロールが出来ない。

今だって、嬉しくて泣いているのか、怖くて泣いているのか、本当に
わからないくらいめっちゃめちゃだ。

体は震えてるし、僕の腕をつかむ力は強くて、爪が食い込んでいる。

でも、涙と鼻水でめちゃくちゃな顔はたしかに、嬉しそうに笑っているのだ。

「……泉い。大好き」

「うん。僕も。本当はね、僕、高校はいった頃からエリーのこと…好きだったんだよ」

「……私、もつと前から」

「あはは。負けた。……僕も、ひとつ教えるよ。僕が、世界を絵本に例えだした訳を」

僕は彼女の髪の毛を手ですいてあげながら、秘密をさらしてくれた彼女に、僕のことを教えることにした。
特筆して秘密ではないけれど、けど、これも一種のトラウマなのかもしれないから。

「僕はね、昔、妹がいたんだ。僕より二つしたの、可愛い妹が」

初めてエリーに話す…というより、こんなこと、初めて人に話すのかもしれない。

世界を嘘で作られた絵本だとする僕の持論は、僕の親しい人は皆知っている。

エリーしかり、家族に友人。

でも、その持論に至る過程を、誰も知らない。

「妹はね、遥っというんだ。…よく覚えてないんだけどさ。僕と遥

はね、すごく仲が良かったらしいんだ。それこそ、何をするのも一緒って感じで。僕と遥はね、毎日、絵本を読んでたんだ」

「……絵本って、あの？」

エリーは僕の机の引き出しを指差した。

その引き出しには、妹が遺した絵本がある。

僕の宝物で、嘘の証明。

「うん。…でもね。遥は…殺されたんだって」

それは昨年聞いた、真実。

僕が大きくなり、犯人の刑が確定したから僕に伝えたそうだ。

「本当によくわからなかった。まるで絵本だなんて。遥と遊んでた記憶はあるけど…もう薄れてしまってるんだから。せめて忘れないようにあの絵本を持ってるけど、それでも。絵本からキャラクターを切り取ったみたいにな、すっぴりといなくなったんだから。そしてそこにいたキャラは嘘。新しいキャラが入って穴を埋めるけど、それも嘘。嘘だらけ。嘘で作られた世界は絵本なんだよ。だから、僕はそう考えてるんだ」

支離滅裂になったけれど、でも、うまくまとめきれないのだから、それは許してもらいたい。

「…なら、私も、嘘？私はここにいて、泉とキスしたんだよ？」

「うん。…でも、まだ、うまく実感が持てないんだ。まるで、僕がゲームで僕を動かしてるような、そんな奇妙な…」

まるで、離人症のような、そんな感覚。

「なら、私がそれを直す。怖いけど、キスはできたから。何回でもキスをして、ぎゅってして、私が嘘じゃないんだって、教えてあげるから」

それは、とても気持ちのいい言葉だった。

心のそこから僕を受け入れてくれる、そんな慈愛に満ちた瞳が、僕を見つめている。

そして今度はエリーから優しくキスをくれた。

恐怖に耐えながら、有言実行とばかりに。

そして、唇が離される。

「……ね？私も頑張るから。だから、泉も頑張ろ？」

震えながらも、笑みを浮かべて僕を見てくれた。

エリーはこんなにも強がつて、トラウマを克服しようとしているのに、僕も直さなければ、エリーといることは出来ないだろう。

「うん。これから、よろしくね。エリー」

浴衣姿と説教とやきもち

お互いの心の迷いを打ち明けてから、二ヶ月あまりが経過した。学校は終業式を迎えて夏休みに入り、今日はその初日。

この季節になると僕たちの地元は夏祭りを開催し、地域を盛り立てる。

ちなみに今日がその祭りの日で、近所…とはいっても歩いて20分くらいの場所にある神社で行われる。

ちなみにこの神社ら何を祀っているかは地元の人でも知らないから、知ってるのは神主くらい。

歴史ある神社らしくて境内も広く、住み込みで巫女さん達が数人働いているらしい。

たしかに見た目は荘厳ではあるけれど、僕とエリーにとっては祭りの開催地や初詣の場所というイメージしか湧かない。

「ジャックー」

窓を開けて本を読んでいるとエリーがやって来た。

ちなみに格好は以前だした僕の要望に沿ってタートルネックのノースリーブ。

胸元さえ見えなければ、変に意識したりはしなくてすむし、何よりそういった視線を怖がることがわかったエリーのためになるから、二人にとってもいいことだ。

理由が理由であれ、肌をさらしすぎるのはあまりいただけないのは本音だけだ。

「僕は泉だつてば」

「えへへ。夏祭り、今夜だねー」

靴下を脱いで丸めながさういって、自室へと投げ入れて僕の部屋へと入ってくる。

そしてベッドに寝転がる僕の隣に座り込んだ。

「別にお祭りなんて初めてじゃないでしょ」

「……初デート、なんだよ？」

あ、そうだった。

基本的には付き合いがたは以前から変わらないものだから、デートだとかはしたことがなかった。

それに、たまに出掛けるといっても、家族ぐるみの付き合いがほとんどの山中家と羽犬塚家は仲良く出掛けることがほとんどであり、二人きりで……というのは、まだ無かったのだ。

「……そうだね。いつもは部屋で遊ぶだけだから、たまにはデートしなきゃね」

ちなみに僕もエリーも毎年、夏祭りにはいつているのだけれど、僕もエリーもそれぞれの友達と一緒にいつているため、これまで二人でいったことはなかった。

そう考えると、なんとなしに楽しみになってきた。

「……き、今日こそは、手を繋ごうね！」

そう、まだ僕たちは手を繋いだことがないのだ。
理由はエリーの過去のこと。

けどまあ、理由はわかってるし、キスもハグもしているのだから、あまり慌てるようなことじゃなきゃけれど。順序がめちゃくちゃなカップルである。

「そんなに無理しなくてもいいよ？また泣いちゃうかもしれないんだし」

以前、手を繋ごうとトライしたときには、あまりの恐怖感をエリーが感じてしまったために、指先が触れた段階でエリーが号泣、断念することとなった。

しかし、最近のエリーも不思議なことで、泣いているときに髪をすいてやると泣き止むのだ。

「…うつん、私、泉と手を繋ぎたいの。私は泉が大好きなの。泉と付き合ってるんだって、友達に知らせたい。手も繋げないのに言っただころで信じるひとたちじゃないでしょ？」

「そうだね。特に、僕の友達なんかは」

変わり者揃いで面子も濃いものだから、相手するのに多少疲れたりする。

けどまあ、気心知れていてよく遊ぶ仲間でもあるから、信頼をおけることは保証付きだけれど。

「手を繋ぐのが無理なら、腕を組むとか！」

「ハードル上がってるよ」

「そっなんだけど、ほら。私ってハグは平気になったから、そのノリで行けるだろうし」

ともかく、僕と恋人らしいことをしたいという。

僕もいい加減、エリーについてのいちゃもんにもうんざりしていることだし、エリーは僕の彼女だと、堂々たるとして胸を張りたいところだ。

そんなことを思っていると、うつ伏せている僕の背中に、エリーが覆い被さる。

腰の位置で座り込み、中背のあたりで手を落ち着かせている。

「何してるの？」

「んー、手以外の所は平気なのになあ」

と手を肩の位置まで這わせて、肩をつかむ。

つかんでは離し、つかんでは離しを繰り返す。

ああ、なるほど。

エリーはマッサージをしてくれていたのか。

「あんまりこつてないんだね」

「まあ…運動とかしてる訳じゃないしね」

バイトはしているけれど、それは在宅のもので、パソコン操作による書類の作成、コピーの内職のようなものだ。

毎月、お小遣いはもらえるけれど、とりあえずこの先のことも含めてお金はある程度補填したいと思って先月から始めたものだ。

パソコンの操作はある程度マスターしているので、特に苦労もなくノルマを片付けていて、先月は三万円ほど稼ぐことができた。

ちなみにこれは今日の軍資金だ。

「何着ていいのかな」

エリーはそう呟いている。

容姿端麗で輝くような銀髪が麗しく流れるエリーなら浴衣なんかも似合いそうだと思う。

「…浴衣だと着替えられないしなあ…」

エリーの潔癖は以前ほど激しくはないけれど、それでもやはり体液に関しての嫌悪は健在で、僕の部屋でも汗をかくと、その場で持ち込んだ服に着替えたりする。

「エリーの好きな格好でいいよ。浴衣も見てみたけど…無理は言えないしね」

「…ごめんね。来年こそは、ちゃんと着るから」

「気にしないで。それに、エリーは綺麗だから何を着ても似合うだろうしね」

そういったとたんに、エリーの顔は赤く染まった。

僕は普通に誉めただけなのだけど、エリーには恥ずかしかったらしい。

「ゆ、浴衣も着る……。一日くらい…、汗は我慢できるもん」

「いや、無理じゃなくていいよ」

「か、可愛い私をみてもらいたいのに！」

ああ、なるほど。

けどまあ、今しがた僕もエリーの浴衣姿を見たいと思っていただけだし、目の正月にあやかれるのは、行幸というものだ。

なまじつか美人であるエリーなのだから、すごく楽しみだ。

とりあえず、言い出したらきりがないエリーのために、タオルの数枚は常備しておくことにしよう。

そして、帰りは銭湯にでも寄ってから帰ることでしょうか。

「……うーん、でも、私目立つのは嫌だもんなあ。銀髪だし、碧眼だし」

ロシア系イギリス人を祖父にもつ彼女の髪は流れんばかりの美しい銀色で、まるで星空にかした川のように。

瞳の色も深い紺碧色で、まるで空と海の境界を眺めているかのような、そんな美しさがある。

それに加えて、整った目鼻立ちとスレンダーで長く細い手足。

まるでモデルのようなのだ。

目立たないわけもない。

実際は彼女の両親ともに黒髪なのだけど、染めているということはないらしい。

父親の方の瞳は紺碧とブラウンのオッドアイだから、父親方の血が濃いのはわかるし、銀髪は覚醒遺伝というものだろう。

「悪目立ちじゃないんだし、いいんじゃないかな」

「そうなんだけど……。でも、クラスの男の子には会っただろうから、

ちょっと怖いの」

まあ、たしかに。

それなりの規模の祭りだし、クラスメイトのみならず、全校の男女が一同に会する可能性もある夏祭りだ。

当然、校内で一番とも言われる人気を誇るエリーのことだ。

必ず声をかけられるし、あれこれとしつこく絡まれることは請け合いだ。

「……………よし」

僕はひとつ考え付く。

けどまあ、打開策というよりは妥協案なのだが。

「エリー。浴衣姿は、今から…僕だけに見せてくれないかな？お祭りまでは部屋でデートしよう」

在宅デート、自室デートというものが昨今では主流であり、基本的には僕の部屋で過ごすことの多い僕たちだ。

服装を浴衣に変えるだけで気分も変わるのではないだろうか。

「…うん！デート！」

どうにも本当にデートにこだわりがあったようで、デートであるならば、在宅だろうが夏祭りだろうが変わらないらしい。つまり、形式にこだわっていたのだ。

「それじゃ、着替えてくるね！」

ソックスを穿いて、窓から出るとささっと自室に戻っていった。

ちなみに我が家の屋根は平たくて、傾斜はない。

エリーの家もそうだ。

屋根と屋根の隙間だって20センチ程度だから何かしらトジを踏まない限りは落ちないだろう。

でも、やはり思っことはひとつ。

「玄関使つてよ……」

その一言に尽きるものだ。

――

エリーが着替えに戻ってから数十分。

恐らくは慣れない浴衣の着付けに手間取っているのだろう。

ただでさえ慣れなければ難しいのだから、仕方ないのだけど。

とくに女性の浴衣にはおはしりもあるし、帯だってあるから、気付けは難しさと面倒さが両番でやってくる。

かくいう僕はすでに愛用の浴衣。

普段あまり着ることはないけれど、一度覚えた着付けはなかなか忘れることはなく、とりあえずエリーに合わせてみたのだ。

ピンポン。

チャイムがなった。

恐らくはエリーが着替えたのだろう。

さすがに浴衣のまま屋根を歩くわけにはいかないので、おとなしく玄関から来たのだろう。

毎回玄関から来てくれないだろうか。

階段を降り、玄関まで歩いてから念のために覗き窓から外を見ると、やはりエリーだった。

僕は玄関を開け放つとエリーを招き入れる。

「あ、あの…どう？変じゃない？」

そう言つて玄関口でくるりと一回転。

髪は後ろでアップにまとめられて星の髪飾りを刺していて、後れ毛が眩しいうなじ美人に。

浴衣は黒地に赤と黄色の金魚の模様が優雅に映えて、帯は浴衣の模様を殺さないように無地の山吹色。

そしてそこには紺の帯留めにエリーの瞳と同じく紺碧の蜻蛉玉が眩しく輝いていた。

「……………」

思わず見とれてしまった。

いつも見慣れているエリーが、別人に写ったから。

照れながら僕に余すことなく浴衣姿を見せてくれるエリーはとても美しく、僕はただ頷くしかできなかった。

「と、とりあえず上がりなよ」

そう言つて僕は彼女を先に部屋へと通して、飲み物を用意するためにキッチンへとむかった。

ダイニングには従姉さんがいて、今の僕の反応について見ていたのか、笑っていた。

「あんだ、エリーちゃんに見とれすぎ」

と、ケラケラ笑っていた。

「ほつといてよ。本当に可愛かったんだから」

「まあー、あれは彼氏の欲目抜いても可愛いよね。精々、お祭り楽しみなさいな。私は痴漢をしょっぱくだけだし」

従姉さんのいる性犯罪捜査の部門は今回の夏祭りでは痴漢やスリなどを防止するために配置されるらしい。

そして神主や主任達との事前の会議が終わったので、昼休みを利用してくつろぎに来ているのだ。

ちなみに格好は私服警官なので私服。

Tシャツにジャケット、ジーンズという動きやすそうな出で立ちだ。

「そうするよ。従姉さんも、頑張つてね」

「何もないなら頑張らなくていいの。性犯罪はね

、今日起こらなくても、明日起こるかもしれないし、明日じゃなくても明後日かもしれないんだから。こればかりは犯罪全体の話だけだね」

身に積まされそうな話ではあるな。

先日聞いた、エリーの過去だつて。

もしかすればエリーが性犯罪の被害者にならなくても、だ。

他の誰かが、あるいはエリーが別の日に被害を受けたってことも、あるから。

従姉さんはもう何年もそういう事案に携わり、そう言ったことをした人達を相手取ってきた。

だから、気楽ではいるけど、気は抜かないというスタンスでいるのだ。

それに…、エリーが僕以外に過去を話した、唯一の人だ。

だからこそ、僕にはこうして釘を指すように申すのだろう。

だからこそ、身に積まされそうなのだ。

「確かに、性犯罪…特に痴漢は冤罪だってあるけどね。女性の証言のみで片がつくことだってある。私もそれは気に入らないもの。けど、強姦とかは違う。あれはDNAが出るもの。でも、捕まえても、それでも、刑務所から出たら…また繰り返す人も多い。私はそれが悔しくて仕方ないのよ。あんたがエリーちゃんを大切にしているのは知ってる。でも…もし何かあれば、私はあんたでも許さないからね」

二つの観点からものをのべる。

それはある種の達観ともとれる言葉。

従姉さんは僕がエリーを大切に出来るかを、試しているのだ。

性犯罪には痴漢や強姦はおろか、家族間の性的暴行に、カップル間の性的暴行すらもカテゴライズされるから。

「はあ…疲れてんのかしら。あんたにこんなこと言うなんてね」

苦笑いを浮かべ、ほとほとあきれたようにため息をついた。

近年は特に性犯罪が多いと聞くと、学校でもその手の指導が行われるに至るほどに劣悪だそうだ。

そのぶん、従姉さんたちの負担は増えるのだから、こうして説教を垂れるのも仕方のないことなのだろう。

「僕たちは大丈夫だよ。もし何かあれば…そのときは遠慮しないでエリーの味方になってあげて」

僕はジュースとお菓子を盆にのせて、キッチンをあとにした。

部屋へと戻ると、ベッドに腰かけているエリーが、僕の隠してあった思春期の聖書を手にして、涼しげな顔で、というか、侮蔑の入り交じった表情で眺めていた。

「あ、あの…エリー…？」

「ジャック？」

怒気の入り交じった声に、思わず身がすくんでしまう。

あんなに怒るエリーは初めてだ。

いかにもな不機嫌といった具合に頬を膨らませ、目尻には涙。

「ごめんね、私胸ないもんね。やっぱり男の子って巨乳がいいんでしょう？」

「あ……いや、その。偶々だよ、偶然」

確かにエリーはスレンダーなぶん、バストなんかは控えめだ。でも、人それぞれにバランスがあるのだから気にしなくても……って、今は何をいつても言い訳にしかない。

「泉がこういう本を持ってるのはいいよ。男の子だし、私は無理なんだから。あー、もう！なんで私はエッチな本にやきもちやいてるのよー！！」

と叫んで本をゴミ箱へと投げ入れた。

ちなみに僕のすむ町では本は古紙回収でしか捨てられないので、ゴミ箱へは捨てられないのだが。

「後学のため…って読んでみたけど。ねえ、泉はやっぱりおっきい方がいいの？」

「……そうでもないけど。とりあえず、恥ずかしいからこの話題は止めようよ」

僕はテーブルに盆を置いて、熱くなった顔を隠すためにベッドへと身を投げてうつ伏せた。

激励と恋路と友達と

従姉さんと話して、絶対にエリーを大切にすると誓って、エリーに思春期の聖書を発見されて大泣きされてから、数時間。

しばらくは不機嫌ながらも甘えに甘えたエリーは一度帰宅してシャワーと着替えを済ませてから、僕たちは神社の祭りへと向かった。

今は自宅と神社を結ぶ道程の中程で、町から巣講師離れた場所にある農道のような道。

周りは田畑がならんでいて、僕たちの家のように田畑のなかに住宅がちらほらと見える。

その中で一つの家に、僕たちは立ち寄ると、インターホンをならした。

少ししてから反応があり、玄関扉が開け放たれ、僕たちと変わらない年頃の少年と少女が出てきた。

「おつす。急に誘いかけて悪いな」

「気にしないで。僕たちもお祭りには行くつもりだったから」

僕より少しだけ背の高い彼は、僕のクラスメイトであり、気心の知れた友人の一人でもある、桜井昌樹。

サッカー部に所属していて、次期主将といわれるくらいのプレイヤー。

「エリー、あの話、本当なの？」

と、エリーに話しかけたのは昌樹の双子の姉であり、僕とエリーの

友人の桜井小春さん。

女子テニス部の部長を勤めていて、高校レベルではトップクラスの実力者らしい。

高校に入学したての頃はエリーをテニス部に誘っていたのだけれど、汗をかくことを極端に嫌がるエリーの意味を尊重して、それ以降は勧誘しなくなった。

「…うん」

エリーは頷くと、そつと僕の方へと距離をつめて、腕を組むように抱きついた。

たしかに、ハグができるのだから、その勢いでなら腕を組むなんてこと、造作もないようだ。

「あんたたち、やっとくつついたのね。残念だったわね、昌樹。エリーは山中のものになっちゃったわよ」

「んなもん、最初にふられたときに諦めてるよ。羽犬塚、良かったな」

「うん、ありがと」

「それじゃあ、行きましょ。早くいかないと、人がごった返すし」

小春さんがいった通り、早めにいつて拠点的な場所を確保しなければ、あまたに及ぶ人が群れをなすために、集団では行動しづらくなる。

ちなみに去年までの拠点は、境内にある大きな銀杏の木。

そこを拠点にして、一人二人が食べ物やら飲み物やらを調達してくるといったことをしていたので、今年もそうすることにした。

「いや、でもまさか泉が羽犬塚と付き合うなんてな。お前、二ヶ月くらい前までは羽犬塚は苦手だとか言ってたか？」

「エリーは美人だからね。校内でも人気あるし、家が隣だから。理不尽な理由で恨まれたことあるからさ、それでそういうことにしておいたんだよ。でも、エリーのことはずっと好きだったんだよ」

「なんともお前らしいというか。サッカー部の野郎共にはオレから言っというてやるよ。バカ抜かしてねえで練習しろってな」

「ありがとう。でも、昌樹はエリーのこと、好きだったんだね」

先程聞いたときは少しだけショックだった。

でも、ひとの、それも友人の恋路に口を挟めるような人間でもないし、エリーを恋慕う男子は僕を含めても多いのだから。

それはまあ、仕方ないことだ。

「ふられたときに、羽犬塚がお前のことが好きだって言うのに気づいてな。それから応援してたんだ。やっぱ好きな子には楽しそうに笑っててもらいてえじゃんよ？」

純粹にそう思ってくれていたのだろう。

力強く僕の肩を叩きながら、そういった。

彼は友人たちのなかでも、大親友とも呼べる存在。

喧嘩したりすることもあるけれど、それはやっぱり…、友達じゃないや出来ないことだろう。

本当にお互いのことを分かってるから、本気で喧嘩することができないのだ。

なら、僕とエリーは？

僕とエリーは、お互いを知っている。

いや、知りすぎているとさえ言える。

それでもやはり、喧嘩したりするのだろうか。

気に入らないことを、遠慮なくぶつけ合えたりするのだろうか。

でも、それでもし…エリーを傷つけてしまわないか、不安になった。

「…？泉、大丈夫？」

エリーは心配そうに僕の顔を覗き込む。

「うん、大丈夫。少しだけ…考え事」

心配させたくないと思って、ついいてしまう。

けど、これもやはり、エリーが心配してしまうことの原因だ。

僕は考え事すると表情が消えるらしい。

エリーからすればそれは辛そうに見えるという。

「悩みがあるなら…言ってね？私でよかったら、聞くから。協力するから」

「本当に大丈夫だから。いつもの癖だよ。エリーは心配性だね」

僕は空いている方の手で、エリーの銀色の髪を撫でてあげる。

恥ずかしがりながらも、エリーははにかみながら嬉しそうに委ねてくれた。

「エリー、本当に山中が好きなのね。どこどうしたらそんなに惚れられるのよ？確かに、山中は女子の人気高いけど。あと、一部の男

子」

「やっぱり男子に人気あるの！？怖いよ！僕の高校生活を仇花で彩らないで！！」

僕は別に女顔だったりするわけでもないし、体だって細くも太くもない、背だって普通なのに。

女子の場合でも頭を捻るのに、男子まで来ると頭痛を覚える。本当に勘弁してもらいたい。

「あはは。まあ、その辺りは置いておいて、何でなの？」

「こつちに越してきた時、私はね、人が怖かったの。今でも…ちょっと怖いけど。でもこんな髪だし、目の色だから。やっぱり人が寄ってきちゃうよね。怖くて仕方ないときに…泉はクラスメイトの人たちを言いくるめて、距離を開けてくれたの。それで、帰りなんかバスに遅れたりしたとき、暗くなったら、一緒に帰ってくれた。ご近所だからって、そんな軽い理由だけで、当たり前みたいに優しくしてくれたの。……そしたら…いつのまにか好きになっちゃって」

嬉しそうに語るエリーは、思い出を反芻しながら目を細めていた。けどまあ、たしかに。

僕は隣の家だからという感覚で彼女のサポートをしていたのは確かだ。

人が群がれば、集まられるのは苦手みたいだからと、それとなく噂を広めたりしたし、帰りも暗ければ一緒に帰ったし、傘を忘れてたら貸してあげたりもした。

無意識に行っていたことが、エリーの意識をこちらにむけたのか。でも、そんな偶然も嬉しく感じる。

だって、それは本当に本物だって、わかるのだから。
嘘で塗り固められた好意じゃなくて、心からの想いだから。

「そりゃ惚れるわ。私でも惚れるわ。ナチュラルにそんなことやってるなんてね。嘘の世界に住む人だから、何しても無関心か…。それが運よくエリーの心を射止めたと。本当に絵本みたいだわ、それ」

傑作だとばかりにおなかを抱えて笑う小春さん。

でも確かに、まるで本当に絵本のようなようだ。

あるいはきれいに色付けされた漫画か、小説か。

どれにしたって、笑えて仕方がない。

気持ちには真実でも、やはり僕たちは嘘で作られた絵本の中のキャラクターなのだろう。

滑稽すぎて、吐き気すら覚える。

「……でもね。私、泉の手だって握れないの…。泉が私に触れることが、こわい。私がこんなだから…泉を待たせちゃう…」

「え、でも。羽犬塚は泉に抱きついてんじゃん」

「違うの…。何て言えばいいのか、分かんない。言いたくないの。怖いから、聞いたらきつと…。軽蔑されるから、同情されちゃうから。そんなの、友達にしてほしくないから。言えないの」

感情のコントロールが効かなくなってきたのだろう。

涙はポロポロとあふれて、乾いた農道の地面に染み込んでいく。

話せるはずもない。

こんなこと、友達に話せることじゃないんだ。

「エリー……。ん、わかった。じゃあ、聞かないわ。昌樹もそれでもいいわよね？」

「嫌がってんのに聞くかよ」

笑いながら二人は頷きあった。

「エリー、いいこと教えてあげよっか？」

「……え？」

「私ね、実は山中のこと、好きだったのよ。エリーよりも前から」

驚かされた。

最初は嘘かと思ったけれど、エリーにそのことを告げて僕のことを見つけたその瞳には、全くの嘘はなかった。

「私、不器用なのよね。私も、あんたみたいなのはつきりと言えるような性格だったら良かったんだけど。グズグズしてる間に、エリーに先越されたわ」

「そのどこがいいことなの？ 泉はあげないよ」

いや、僕はものではないのだけれど。

「いいことなのよ？ ライバルってこと。あんたは確かに山中と付き合ってるけど、私は諦めるなんて言っていないもの。私は昌樹みたいなものわかりのいい女じゃないわ。欲しいものは手に入れないと気が済まない。私に取られなくなったら、早いとこ手くらい握れるようにはなりなさい」

意地の悪そうな笑みをエリーに向けて、こっぴどい放った。

「そう言うことだから、よろしくね、山中。………せっかくだし、泉でいいかしら？」

この人、恐らくはエリーへの不器用な後押しをしているのだろうけれど、楽しんでいるようで、不機嫌そうに頬を膨らませるエリーを横目に、満面の笑みで僕に笑いかけていた。

そして最後に

「絵本の世界がうまくいくことだけだと思わないことね。世界には、イレギュラーな要素だってあるのよ。例えば、私みたいな嫌な女とかね」

まるで悪女のような物言いで、空気をかき混ぜる。

でも、浮かべた笑みは次第に優しくなり、エリーのそばへよって、僕から引き離すと抱き締める。

「でも…私はエリーも好きなの。大切な友達。だから手は抜かないわ。応援してるわよ、エリー。私にとられたくないんでしょ？」

「小春…。うん。でも、絶対にあげないからね。でも、私たち、友達だもんね」

お互いの友情を確かめ合うように、抱き締めあった。

この光景は、嘘の世界にあるものとしては、綺麗すぎる。

これが、本物の光景なのか。

それとも、単純に僕が変わってしまったのか…。

それは、わからないけれど。

でも確かに、あの二人はお互いのことをさらに理解したのだ。それは嘘でもなんでもいい、ただそこで、目の前で起こったことは、偽物でも、真実なのだから。

「でも、友達同士で好きな人が同じなんてね。あーあ、エリーが羨ましい。隣だもんね、家」

「いいでしょ。毎日一緒にいるんだよ」

用事でもない限りはね。というよりも、誘わなくなつて屋根を伝つて部屋まで来るじゃないか。

「おいおい、小春は結構諦め悪いのな」

「うーん、喜んでいいのか、微妙なところだね…」

「あら、私じゃご不満？たしかにエリーみたいに細くないけど、胸はあるわよ？」

と、強調するように胸を張った。

浴衣に包まれてもなお、その大きさは誤魔化されることなく、その存在感を強調していた。

「泉…、頑張れよ」

「助けてよ。君のお姉さんでしょ」

「……えい」

勢いのない掛け声と共に、エリーは手を繋いだ。

頬は不機嫌全開に膨らんでいて目尻には涙がたまっていた。

そして、やはり恐怖に耐えているのか、手は震えているけれど、僕は敢えて離さないように、きゅっと力を込めて、彼女の手を握った。

「あらあらお熱いわね。でもまあ、私は諦めないから、よろしくさん」

そう言って神社の方へと歩きだした。

余裕綽々といった雰囲気を経ながら、エリーの恋敵である親友は、エールと共にライバル宣言をして、僕たちを先導していった。

秋の騒がしさ

「もー！小春、泉から離れてよ！」

「いいじゃない。普段は独占してるんだから、少しは融通利かせてよね」

自宅内、自室。

小春さんは僕の右腕に抱きつき、エリーは左腕に抱きついていて、僕はさながらサンドイッチのようで。

こんな光景をクラスメイトが見れば、それこそ嫉妬と羨望の的なのだろうけれど、あいにくのこと、僕にはこの状況を喜べるような気概は持ち合わせてはいなかった。

心春さんはあれから有言実行とばかりに僕への積極的なアピールを開始してきており、エリーもそれに負けじと頑張った成果が出たのか、エリーは手を繋いだり、キスをしたりなどに恐怖を感じなくなっていた。

でも、僕の手が手や顔以外に触れると泣き出したりするので、やはりまだまだ時間はかかりそうではあるけれど、これはきつと小春さんが発破をかけたことが一番の要因なのだろう。

「小春さん、本当に勘弁してよ……」

彼女の純粹な好意には素直に嬉しさを感じるところだけれど、僕にはエリーがいるし、エリー以外の女の子は僕としては考えられないのだ。

僕にだって、エリー以外には言えない過去があるのだから。

「あら、私は楽しいのに。昌樹、やめた方がいいのかしら？」

「やめてやれよ。そんなだと嫌われても知らねえからな」

「あら、それは嫌ね。さすがに好きな人の恋人がライバルじゃ、分が悪いわね」

涼しげな表情でそんなことを言うけれど、僕から体を離すとき、すごく残念そうに感じたのは、気のせいなのだろうか。

「……………泉は、私の。それに、抱きつくのだって……………小春じゃなかったら、絶対に許さないもん。小春だから許してあげたんだから」

「あら、ありがと。でもまあ、私は私のペースだし、エリーの要望すべてに答えられる訳じゃないから、そこんとは気を付けなさい」
そうなのだ。

この人の言う通り、小春さんはとてもマイペースな人で、僕とエリーは普段、学食なのだけれど、二学期に突入してからは気分次第で手作りのお弁当を二人ぶん、三人ぶん用意してきたりする人なのだ。二人ぶんは僕と小春さんのぶんだけれど、時々僕とエリーのために作ってきたりと訳がわからない。

三人ぶんは無論のこと、僕たち三人のぶんだ。

エリーもすごく料理上手だけれど、小春さんもかなりの腕前で、こ
と和食に関してなら隠し包丁などの知識もあり、エリーよりも手
かもしれない。

「私は私なりの恋愛観があるのよ。恋愛は楽しくなきゃね」

僕のそばから離れると、座っていたベッドから腰をあげて本棚へと移動して、辞書の並ぶスペースを見やっていた。

まずい、そこは思春期の聖書を保管している場所であり、見つければ弄られること間違いなしだ。

僕の表情を見た昌樹はなにかを悟ったかのような表情をしており、目線で僕に同情してくれていた。

我が同志よ、君もそこに隠していたのか…！

などと、悠長に考えている暇はなく、小春さんは迷うことなく思春期の聖書を隠している場所に手を伸ばして、それを引き抜いた。

「あらあら、やっぱり男ってワンパターンね。昌樹といい、泉といい。まあ、持っても仕方ないけどね」

「あー、泉ってば。まだそれ持ってたの？小春ー、泉ってば酷いんだよ。巨乳ものは捨ててっていったのに」

論点そこ！？

普通は怒るところじゃないだろうか。

エリーだってその手の本を見たときはめちゃくちゃきもち妬いていたのに。

「どれどれ。……あら、本当。泉、ダメじゃない、エリーは胸のこ」と悩んでるんだから、デリカシーにかけることしちゃ。せめて貧乳ものにしなさい」

おかしい。

従姉さんに見つかったなら、ここで未成年がこの手の本を所有していることを叱るのだけれど、どうしてエリーたちはジャンルのことで怒っているのだろう。

それも、かなり真剣に。

「それから、たぶん…ベッドとマットの隙間でしょ、本棚の裏、カーペットの下でしょ、鍵のかかった引き出し。そう言うところにもあるんじゃないかしら？………ねえ、昌樹？あんたの部屋を掃除したとき、減ってたのよね。捨ててないないなら、どこへいったのかしら？」

「え！？あー…いや…」

昌樹は目を泳がせるが、それは仕方のないことなのだ。

思春期の、それも高校生の男子はその手の本には興味はあれど、購入できなかつたり、買う勇気がなかつたりするものだから、友人づてに貸し借りが行われたりする。

そして、昌樹の本の一冊は、僕の部屋のなかにあるのだ。

それも、小春さんがいったように、ベッドとマットの隙間にだ。

「あははは！あー、やっぱり男の子が困ってるのを見るのって、楽しいわね」

「小春って…何気にドSだよな」

「そうね。でも、好きな人には………ねえ？」

「そんな目でアピールされても、今しがた僕は晒し首にされたも同然なんだけど……」

どうして僕はこんな人に好かれてしまったのだろうか。

というより、どうしてこの二人はこんなにも恥のポイントがずれて

いるのだろうか。

エリーは髪をさわれば恥ずかしがるし、小春さんも同様だ。二人とも髪を触られることに対しては耐性がないのだ。

エリーは理由があつて恥じらいが歪んだのだけれど、小春さんは昔かららしかった。

「私が好きな人に好きにされたいのは本当よ？ただ、私は泉の彼女じゃないもの。なら、弄って遊びたくなるのは当然」

どうやら価値観もいくらか他とずれているようだ。

「つか、小春が泉に構って貰うのにどうしてオレまで来なくちゃならないんだよ？」

「男女の比率が悪くなるし、私の監視役」

「監視役？」

「そ、監視役。エリーは性に関してすごく怖がつてるけれど、私はむしろ開放的なよ。いつ私がバカな真似しでかすか、ないでもないじゃない？だから、その予防」

「思いつき私と正反対なんだね、小春は」

「そうなのよ。だから、私とあんたを足して二で割ったら、ちょうどいいんじゃないかしら？」

そうかもしれないけれど、やはり僕はそんな急いたことは遠慮願いたいから、昌樹の監視役はありがたかった。

それに、僕はエリーと一緒に歩いていくと決めたのだから、彼女の成長を見届けたい。

成長を描いた、絵本のように。

嘘だらけのなかでも、ノンフィクションを描きたいから、彼女の手を握りしめたのだ。

「でもまあ私は結構、束縛するし、お勧め出来ない女だけどね」

ならなんでアピールしてるのさ。

という突っ込みは、彼女の真剣な想いを否定することになりかねないから、飲み込むことにした。

「安心しなさい。私は引き際は弁えてるつもりだから」

なら初めから弁えててよ。

という突っ込みも控えるべきなのだろうか。

どうにもこの人は飄々としてつかみどころがない。

「ねえ、絵本の世界が嘘なのか、それともこの世界が嘘でできた絵本なのか、泉は考えたこと……あるのかしら」

唐突にそう尋ねられた。

僕をとらえ映すその瞳は、とても穏やかで、まるで風のないだ水面のよう。

まるで、年の離れた、達観した女性が目の前にいるよう。

落ち着いたひとだとは、昔から思っていたけれど、こんなにも年が離れているような錯覚に陥ったのは、初めてだ。

「曖昧よね。あんたの解釈も、私の解釈も、似てるけど、全く違うのだから。泉は嘘で作られた世界を絵本だっていうけれど、私とし

てはそれは違つて見えるのよね。それって、私たちそのものが替えの利く偽物のようだもの。この世界は、絵本なんかじゃないわ。絵本が世界は嘘……っていうのが、私の答え。……ああ、話し半分でいいのよ。こんなものは、見方の違い。見る角度が泉と違うだけだもの。単純に、プリズムなのよ。光が反射する角度なんて、断面の角度で決まる。場合によっては、光さえ閉じ込める。ね？見方次第なのよ。でも、結局はこれも曖昧なのよ。泉がどうしてそんな風に考え始めたの化なんて、私は知らないわ。教えてくれないのなら、聞かない。でも、泉は、現実から目を背けてるようにしか、見えないのよ。自分を含めて絵本の世界のキャラクター。それは回りを認めてないのと、同じなのよね。少なくとも、私から見ればそう映るのよ。あんたは、自分の殻に閉じ籠っているだけ。いつだってそこから這い出せるのに、そうしない。だって、怖いから。あんたが目を背けた現実を見たくないから。……どうかしら、面白い話でしょう？これはね、泉がその持論を持ち出してから、ずっと思っていたことなのよ。折角あんたに告白したんだから、伝えることにしたのよ。エリー、あんたはどう思っているのかしら？」

「どうって……言われても。……分からないよ」

「そりゃそうよね。さてと。泉、私は嫌われる覚悟で聞くわよ。あんたは……いつまでそうやって逃げてるのかしら？」

鋭く冷たい視線が、僕を射抜いた。

その瞳は有無を言わせないほどに凍えきっていて、それでいて意思をはっきりと伝える力強さを持っている。

僕が、逃げている？目をそらしている？

分からなかった。

僕がこの持論を持つに至った理由は、分かりきっているのに、だからこそ、この持論を持つに至ったのに。

「訳がわからないって顔ね」

「小春、どうしたんだよ。何怒ってんだ？」

突然重苦しくなった空気に、心配を隠せない昌樹は小春さんにたずねるが、「黙ってて」の一言で、彼女の意図を汲み取ったのか、頷いて黙った。

「あんだ、エリーとの恋愛…心から楽しめていないでしょう」

凶星を突かれた。

どうして、理由も知らないはずの彼女がそんなことをわかり得るのだろうか。

「分かるわよ。私はあんだが好きで、エリーの友達なのよ。機微くらいわかって当然よ」

「でも…、それでなんで、僕が現実を見てないって…」

「まあ、わからないのも無理ないわよ。私たちはまだ子供だし、私が無駄に達観しちゃってるだけだもの。…でも、私はエリーが不憫でならないのよ。確かにエリーの潔癖は病的だけど、だからって触れあうことを遠慮しすぎてるんじゃないかしらね？見たところエリーからしかタッチはないし、私たちがいるから出来ないって風でもない。できることをできることとして受け止めてないんじゃないかしら？勝手な見解で悪いけど、あんだ、エリーを誰かと重ねてみるんじゃないかしら？それを失ったことがあって、失う怖さに負けて、エリーから目を背けてるんじゃない？」

あくまでも冷静に、僕にそういい放った。けど、どうなのだろうか。

勝手な見解とはいわれたけれど、もしも外れているのなら、多少なりとも憤りを覚えるはずだ。

僕は、そんな性格をしている。

なのに、僕は苛立ちを覚えるどころか、不思議な安心感を感じていたのだ。

「泉…、やっぱり、私は…」

エリーが落ち込みそうな感情を押さえつけながらも、必死な面持ちで尋ねてくる。

少しだけ、感情と頭のなかを整理した。

「エリー、ごめんね。たぶん、それは本当。……遥のことを、ずっとどこかで悲しんでいたんだと思う。あの子は、殺されちゃったから。絵本のキャラクターを、そこだけ切り取られたように、いなくなったから。そこに、エリーが来てさ、僕は知らない間に、無意識に、エリーをそう見ていたんだと思う。……でも、やっぱりひとつだけ確かなことはあったよ」

僕は涙を流すエリーの頬をハンカチでぬぐい、そっと、けど強く抱き締めた。

「エリーが好きだって気持ちには、間違いないんだ。エリーは、本物なんだ。遥の代わりなんかじゃ…ないんだよ」

知らず知らず、妹と重ねてしまっていた、エリー。

大切にすることが当たり前で、けど、僕の前から切り抜かれた妹。その切り抜きにエリーが収まって。

僕はきつと、恋愛感情を盾にしてそんな気持ちを見なかったのだらう。

けど、もう、そんなことはなくていい。

今、僕の瞳からはたくさんの涙が溢れている。

あのとき、流しきれなかった、悔しさの涙。

もつと遥と絵本を読みたかったのに。

それは叶わなくなってしまつて。

けど、もういいんだ。

もう、前を見ていいんだ。

だから、今は、今からはしっかりとエリーを見ていよう。

彼女を彼女として、好きでいよう。

「エリー、ごめんね」

「ううん。知ってたから、大丈夫。私が本物だつて教えるって言つたじゃない。小春が教えちゃったのは、ちよつと癪だけど」

と、笑顔を向けてくれる。

ああ、やつとエリーを見ることができた。

遥の代わりではない、僕を想ってくれる、大好きなエリーを。

「……さてと、ちよつとごめんね」

エリーは僕から身を話すと、窓に腰かける小春さんに言った。

「泉の胸で泣いていいよ」

「え？ いや、あんた。あんたの彼氏でしょ？ あんなにやきもち妬い

てたのに、いきなりどうしたの？」

「いいからいいから」

と、小春さんの背を押して僕の胸へとおしやった。

こけるような体制で倒れかかってきたので、つい受け止めてしまった。

「昌樹くん。ちょっとお部屋出てよう。お茶いれるからさ」

「あいよ。親友と姉のラブシーンなんざ見たかねえよ」

そう言つてエリーと昌樹は部屋を出て、階段を降りていった。

どうやら、これはエリーなりの皮肉を込めたお礼らしい。

だって、エリーの意図が今の行動でわかったのだから。

「あ、あの……」

「ありがとう、小春さん。エリーのために、怒ってくれて」

そうして、抱き止めたままで髪を撫でてあげた。

少しだけウェーブのかかったブラウンの髪は、潔癖なエリーほどではないにしろ、とても綺麗で、絹のような手触り。

「ち、違う。私は……あんたのために」

「うん。それでも、ありがとう。折角だから教えてあげるよ。あんな持論を持つに至った、その訳」

僕は髪を撫でながら、天井を仰いだ。

「僕には、二つしたの妹がいたんだよ。何をするのも一緒に、ずっと二人で、絵本を読んでいたんだ。でも、十一年前、妹は殺されたんだ。妹は絵本から切り取られたように、そこらになくなってさ。それからなんだ。回りのことが嘘に見え始めたのは。そして、あの持論に行き着いた」

抱えきれなくなった悲しみを、嘘にして絵本に閉じ込めたのだ。

嘘でできた世界ならば、きっと悲しくないのだから。

だから、僕は世界を嘘でできた絵本にしてしまったのだ。

それは結果として、エリーに辛い思いをさせることになってしまったけれど。

けど、こうして気づくことができたのだ。

思い出すことができたのだ。

だから、もう、エリーにたいして、変な引け目も遠慮も感じる必要はない。

あとは彼女の心が癒えるときまで、癒えてからも一緒に歩み続けるだけだから。

「あ、小春さん、泣いちゃってる。…我慢しないでいいよ。折角、エリーが気を聞かせてくれたんだから。今なら僕も、小春さんを抱き留めていられる」

「……………もう、ばかあ…!! やつと、やつと引き際まで来れたのに! やつと納得のいく失恋ができると思ったのに!! 何で優しくしちゃうのよ! 何であんたを好きでいさせちゃうのよ! 踏ん切りが…つかなく…っ」

今まで押し殺してきた感情が一気に溢れだしたのか、小春さんは大

声で泣いた。

初めから、こうするつもりで。

僕とエリーのために、僕に嫌われる覚悟で、自らを残酷は役回りにしたのだ。

けど、残酷だとしてもだ。

僕もエリーも、こんな失恋のさせ方なんて、絶対に嫌だ。
とうせなら、笑っていられるようにしたいから。

「落ち着いたら、お茶にしようね」

そうして、エリーのライバルが泣き止むまでの一時間あまりを空に居るであろう遙にことのいきさつを伝えながら過ごした。

雨と溶けない心

「疲れたー」

エリーは溜め息を吐きながら、ひとつ大きく延びをした。

校則ではブラウスやシャツはスカート、ズボンのなかにいれてなければならぬのだけど、エリーは汗をかいて不快だと、放課後はブラウンをスカートから出している。

すると、そんな動作なのだ、スカートとブラウスの間からは彼女の日に焼けていないきれいな白い肌がのぞく。

まあ、見えたところで気にはしないけれど。

ちなみに今日は来週の日曜日に行われる体育祭の準備で、グラウンドの整備をしていたのだ。

男子生徒は荷物運びやテントを設営して、明日のリハーサルの準備。女子生徒はグラウンドに落ちている小石を拾ったり、整地やライン引きをしていた。

つまり、僕たちは絶賛土ぼこりまみれ。

そのお陰で身体中がジャリジャリするし、エリーに至っては午後からはずっと不機嫌なのだ。

少しずつ潔癖が鳴りを潜めては来ているけれど、それでもやはり体に汚れがついたりすることは嫌なようだ。

「あー、汗が気持ち悪い。土ぼこりに混ざって嫌。最悪」

と、こんな感じだ。

けどまあ、エリーでなくても、この独特な不快感だけはどうあって

も慣れることもないのだが。

けど、何でもまた高校の体育祭にリハーサルなんてするのだろうか。やはりいいな町だし、地域参加型の形式だからなのだろうか。

「帰ったらお風呂はいる。泉も、私がいくまでには入っててよね」

「うん。僕もさすがに気持ち悪いし」

僕たちが帰り道を歩いていると、一台の白いプリウスが走ってきた。プリウスは僕たちのわきで止まると、窓が開いていく。

「あんたたち、今帰り？」

母さんだつた。

けど、我が家には白い車はあれど、それはガイアだ。同じトヨタでも形式も年代も違うのだが。

「母さん、その車は？」

「会社の車。今日から出張だっていったでしょ」

「あ、そっか。一回帰ってたの？」

「アメニティを忘れてたのよ。あんた、父さんも今日はいないし、京子もいないけど、お夕飯はどうする？なんなら出前の代金渡すけど」

京子とは従姉さんのことで、従姉さんが警官になってこっちの警察署に配属されてからは同居している。

「あ、私を作る。泉にはお世話になってるし」

「エリーを作るなら出前より美味しいもの食べられるわね。ま、仲良くやりなよ。親がいないからって、節度は守んなさい」

窓を閉めながらそう言って、母さんは走り去っていった。

なんとも淡泊な性格をしているけれど、父さん曰く、僕は完全に母さん似らしい。

「作るって、何作ってくれる……の？」

ポツリポツリと冷たい水滴が頬を濡らした。

曇り空ではあったけれど、まさか雨が降るなんて、とは思った。

何せ、雨雲にしては薄くて、明るかったから。

けど、雨足はいきなり強くなり、豪雨とも言えるような、そんな勢いで僕たちを打ち付ける。

僕はブレザーを脱ぐと、エリーに被せて手を引いて走った。

「ついてないなあ。まさか通り雨？」

僕たちを襲った豪雨は十分後には止んでいて、走って帰ったものだから、すでにお互いの自宅は目の前だった。

ひとまずエリーを家に送ってから帰ることにした。

「あれ？……？……泉、鍵、学校に忘れたみたい……」

「え？おばさんたちは？」

「新婚旅行」

エリーの両親はこちらがごちそうさまと言いたくなるくらいの熱愛ぶりであり、毎年必ずこの時期に一週間程度の旅行に出掛けるのだ。それも必ず、新婚旅行と銘打ってだ。

まあ、それ自体はほほえましいことなのだけれど、今回は運が悪く、両親は不在だ。

学校だって閉門の時間なのだし、鍵は取りに行けない。

行くとなれば、明日は土曜で部活で開いているから、そのときに事務員さんに事情を話すしかない。

「…くちゅん」

エリーが可愛らしくくしゃみをする。

体が冷えてきたらしく、このままでは風邪を引きかねない。

ひとまず彼女を僕の家で休ませることにした。

――

「お湯、いただいたよ。ありがとう」

リビングでくつろいでいると、僕のジャージを着たエリーが姿を見せた。

「うん。けど、どうする？家にはいれないんじゃない、着替えも取りに行けないし」

一日に最低は二回、多いときは複数回の着替えをする彼女だ、とてもじゃないけれど、我慢できないだろう。

「うーん…一応、あと一回ぶんの替えはあるんだけど。今日は着替

える暇なかったし。最悪泊まるにしたって……あ、この家、乾燥機あったよね。洗って乾かそつと」

いうが早いかエリーは再び脱衣場へと赴いた。

今は洗濯機も乾燥機のなかは空っぽだから、まあ、問題ないだろう。一先ずの心配は無くなった。

僕は携帯を取り出すと従姉さんにコールしてみる。

今日は非番で、彼氏さんと買い物らしいのだけれど、エリーが自宅に帰れずに泊まるしかない状況で僕たちだけはまずい。

だから、折角の時に悪いのだけれど、監督者として帰宅してもらいたいのだ。

数コール待つと従姉さんが応対に出てくれた。

「もしもし、どうしたの？」

「急にごめんね。彼氏さんとデートだったんだよね？」

「そうよ。それで、何？」

「エリーが家の鍵を学校に忘れたみたいでさ、取りに戻れないし、今日はもう泊まるしかなくて。それで、父さんも母さんもないし、エリーの両親も旅行にいつてるからさ、悪いけど……帰ってきてもらえないかな？」

「あー、はいはい。そういうことね。ちょっと待っててね」

スピーカーから遠い声が聞こえてくる。

二つ聞こえる声の片方は従姉さん。

もう片方の少し高めの男性の声は彼氏さんだろう。

きつと、事情を説明してくれているのだ。

「おまたせ。彼氏も泊まるけど、いい？」

「こっちがお願いしてるんだから、遠慮しないで」

物事を頼む手前、そんな遠慮は受けとることはない。
彼氏さんとのデートを邪魔したのはこっちなんだし。

「それじゃ、今からいくから。たぶん、30分くらいで帰るわ」

そう言い残して、通話は終わった。
それと同時にエリーが戻ってくる。

「今から従姉さんが来てくれるってさ」

「どうして？」

「僕たちだけしかいないのに、泊まるのはまずいよ。エリーがどれだけトラウマを克服しても、まだ完全じゃないし、僕が何かの拍子でひどいことしないとわからないでしょ？」

「あー、なる。キスはできるのに間接キスは嫌って、なんか変だけどね」

それは恐らく、粘膜接触の問題だろうけど。

唇だって唾液や粘膜で覆われているけれど、それは意識内には入らないものであるから、エリーは平気なのだろう。

けど、間接キスなんかは一度口をつけられたものを、自らも口をつけるのだから、エリーにとっては嫌が応でも意識せざるを得ないの

だ。

「それはまあ、おいおいね。焦らなくなっただけいいよ。僕はいつまでだって、待ってるからさ」

「……うん。ありがと。なんだか、前より優しくなったよね、泉は」

「そうかな？どうなんだろう」

「きつと…妹さんのこと、ケジメついたからじゃないかな」

「……そうだ、ね。おかげで、今は純粋にエリーを見てられるし」

優しくなったかはわからないけれど、それでも、僕はエリーを遥と重ねてしまうことはなくなった。

どれだけ辛くても、遥を現実として受け止めて、僕はちゃんと前を見て進めるようになったのだから。

「ねえ、何食べたい？」

料理上手なエリーが、本日の夕食を作ってくれる。

彼女の手料理を食べられるなんて、とても嬉しいことなのだ。

まあ、エリーは小春さんにもチャンスと…ということで、学校のお昼には僕へのお弁当づくりを継続させている。

小春さんも嬉々として作ってくれてはいるけれど、僕から見ればエリーの勝者の余裕を見せている姿が目に見えなくて仕方ないのだ。

「うーん…じゃあ、オムライス」

「おっけー。お姉さんも一緒なら…」

「あ、彼氏さんも泊まるって」

「え？なら、お姉さんたちが帰ってから作ろうかな」

エリーはつけかけていたエプロンを取り払うと叩くような仕草をして壁にあるフックにエプロンをかけた。

そしてリビングへと戻り、僕の座るソファの隣へと腰かける。

「運が悪いと思ったら、運がよかったね」

「そう？」

「だって、泉のおうちにお泊りなんて初めてだから」

思い返してみればそうなる。

家が隣同士で、なおかつお互いの部屋は屋根を伝って行き来できるし、幼い頃から一緒にいるなら別だけれど、彼女が着たのは中学二年生の頃だ。

すでに思春期に入っていたし、当時はまだ知らなかったとはいえども、エリーのトラウマもあるから。泊まるなんてことはあり得ない話だった。

「でも、部屋はどうしよっかな。従姉さんの部屋で寝る？どんな人かはわからないけど、彼氏さんは客間に通してさ」

泊まる場所は重要なところだろう。

何しろ、同性が泊まりに来ているわけではないのだ。

昌樹が僕の家に泊まったときは普通に僕の部屋に布団をしいていたし。

けど、エリーは女の子だ。

例え相手が僕であっても、男と同室なんて嫌だろうから。

「……お姉さんの許可が出たら…泉と一緒に寝る」

「…え？…いや、嬉しいけど、怖いんじゃない…」

「怖いけど、ハグだって何分も出来ないけど。でも、怖くても、泉なら、優しくだっこしてくれると思うから。怖くても、眠れると思うから、大丈夫だよ」

「あ…うん」

正面切ってそんなことを言われると、照れ臭くて叶わなくなる。僕は視線をそらして、生返事を返した。

「それに、私が積極的にならないと、きっと直らないから。泉からは難しいかもだし、私から甘えるの」

嬉しそうに思いを語る。

エリーは本当に進歩している。

初めは手すら繋げなかったのに、今では手を繋いで歩けるし、短い時間だけでも抱き合ったりするし、キスもする。

この数カ月の間に、彼女は少しずつ自らのトラウマに打ち勝ってきた。

それから約四十分後。

玄関が開け放たれる音と共に、二つの靴音が聞こえた。
片方は従姉さん愛用の赤いヒールの靴音で、もう片方は聞きなれないけど、恐らくは男性もののブーツの靴音。

予定より少しだけ遅い帰宅だった。

僕らが帰った時間もすでに夕方の六時を過ぎていたし、従姉さんたちの到着のころにはすでに日は落ちていた。

「ただいまー。いや、ごめんね。コンビニで飲み物買ってきてたのよ」

と、リビングに姿を現した従姉さんの手には、このあたりではあまり見かけないコンビニの袋が提げられていて、その中にはコーラやオレンジジュースなどの飲み物が多種多様に入っていた。

「おかえり。従姉さんたちは、夕飯まだ？」

「うん。どうせだし、一緒に食べようと思ってね」

「なら、オムライスにするんだけど、プレーンと半熟はどっちがいい？」

ちなみに僕個人はオムライスはプレーンが好きだ。

きちんと火が通っている方が、なんとなく食べやすい。

けどまあ、エリーの作るものは大抵が美味しいものだから、大差はないけれど。

「プレーンで。…ほら、あんたも、いつまで隠れてるの？私のかわい従弟とその彼女に顔見せなさい」

そういえば、先程から姿が見えないと思ったら、隠れていたのか。人見知りな人なのだろうか、ずっと玄関でたちばうけだったらしい。

「うわ、引つ張るなよ……。あ、ども。京子の彼氏の簀沢克俊です。一応、警官です」

「署は違うけどね。珍しく連休が被ったからね」

なるほど。

通常はめったにデートにいかないから、じつは彼氏の存在を疑っていたこともあるのだけど、同じ警官で警察署の所属が違うのなら仕方ないだろう。

心のなかで従姉さんに謝っておくことにした。

「山中泉です。こっちはエリー」羽犬塚。今日は我が儘聞いてもらってすみません」

「いや、気にしないでよ。京子が話してる自慢の弟カップルには会ってみたかったしね」

隠れていた先程の印象とは違い、やけにフランクな対応をしてくる、克俊さん。

エリーは楽しそうに僕のとなりで微笑んでいて、賑やかな雰囲気。僕も笑みがこぼれる。

「それにしても、泉くんは背が高いな。俺より高いんじゃないか？」

どうなのだろうか。

僕自身は大して身長に興味を持ったことはなくて、人と比べたこともない。

更にはエリーともそんなに背は変わらないので、僕の背はそんなに高くないと思っていた。

「エリーちゃん、身長いくつ？」

「たしか… 172センチだったかな」

そんなにあったのか。

背は高い方だとは思っていたけれど、まさかここまで高いとは思わなかった。

「泉は？」

「178センチ」

ということは、昌樹は更に背が高いのか。

僕より少し高いくらいなので、182くらいが妥当なところだろうか。

けど、双子でも小春さんはいくらか小柄だった印象がある。

「同じ血縁とは思えない長身ね。私が… 159センチ。克俊がたしか170くらいよね？」

「じみにエリーちゃんより小さいんだよな、俺」

と、克俊さんは落胆していた。

僕は基本的に身長は早く延びていたので、小さい順に並ぶときはだいたいが後ろだったけど。

それにしてもエリーの背がそんなに高いとは思わずに、驚いてしまった。

「それじゃ、私はご飯作るね」

ご機嫌な様子でソファから腰をあげ、キッチンへと歩いていくエリィを後目に、従姉さんはコンビニの袋からビールを取り出してプルタブを開けて、一口飲み下す。

「ーっはあ…。あー、ビールなんて久しぶりだわ」

「普段は仕事で飲めないからね」

警官勤めで、なおかつ非番以外は二十四時間体制で事件対応の連絡を待っているのだ。

そのために普段はお酒なんて飲めないものだから、こういう日くらいは好きに飲ませて酔わせてあげることになっている。

……のだけど、従姉さんは昔からお酒を飲むと人に抱きつく癖があり、大抵の場合、僕が被害を被ることになる。

エリィと交際中である僕なのだ、いくら従姉さんでも嫉妬しないと限らないから警戒に越したことはないが。

まあ、今日は克俊さんがいるから、克俊さんに任せておきましょう。

「ほら、あんたもなにか飲みな」

そう言つて、僕の方へコンビニの袋を放ってくる。

何本もペットボトルや缶ジュースが入っているものだから、受け取ったときの重さは半端なかった。

ちなみに炭酸系も入っているので、開けたときに溢れないか心配である。

「それじゃ、コーラもらうよ」

僕はペットボトルのコーラを取り出してキャップをはずすと、一口飲んだ。
独特の強い炭酸が甘さと酸味にマッチしてとても爽快な味わいだ。
普段は炭酸系は飲まないのだけど、たまに飲む分には美味しいと思う。

―食事風景―

「おー、おいしそう」

「私特製だよ」

「……お、うまい。京子よりうまいんじゃない？ あいたたたた！」

「あんだって？」

「な、なんでもないです」

まさか目の前で脅迫が行われるとは思いつかなかった。
しかも、警察官の実演である。

――

エリーの特製オムライスを食べてから、少し間をおいてから入浴して、時間はすでに夜半の頃。
従姉さんはすでに泥酔していて疲れもあいなって自室にて爆睡中。
克俊さんは従姉さんの面倒を見るために同室にて宿泊することになった。

エリーは従姉さんが寝てしまう前に僕と同室で寝泊まりすることに許可を得たので、現在は僕のベッドでくつろいでいる。

ちなみに従姉さんは泥酔しているとはいえども、寝る前の記憶はきつちりと覚えている人なので、許可に関しては問題ないだろう。お酒に酔って判断能力が鈍ってそうだけれど。

「そろそろ寝ようかな。エリーはどうする？」

「んー…眠たい」

そう言うとエリーはころんとベッドに転がった。

「ん。僕は布団敷くから、何かあったら起こしてね」

「だめ、いつしよにねるの」

「え、でも…」

「私から甘えないと…泉は私に遠慮するから…」

そういえば、夕方頃はそんなことを言っていた。

僕は少し考えるが、やはり彼女を怖がらせることには抵抗がある。

「私が泉の方に潜るからね」

その言葉で諦めがついたので、僕は仕方なくエリーと一緒にベッドに横たわり、布団を被った。

「……なんだか、ドキドキする」

「…やっぱりやめた方が…」

エリーはすでに僕の腕の中に抱かれるようにして収まっていて、少しだけ恐怖に耐えるように、震える体を抱いていた。

「でもね…、なんだか、気持ちいいの。ドキドキするけど、怖いドキドキじゃないの。嬉しくて、それがよくわからなくて、ちょっと怖いだけ。今はね。すごく幸せ」

体を翻すように僕の胸に顔を埋めるように抱きついた。

僕も彼女を離さないようにしっかりと抱き締める。

「……………ねえ、たぶん、今からまた怖くて仕方ないと思うけど…。でも、離さないで。泣いても、ぎゅってしてて」

そういうエリーの体はすでに震えていて、口を閉じれば歯がうちならされている。

僕の背に回されている右手は爪を立てて、僕の背中は痛みを感じている。

「うん。大丈夫だよ。エリーが眠れるまで、こうしててあげるから」

「…うん、ありがと。あ、だめ……………」泣きそう…」

「我慢しなくていいよ。辛いこと、全部吐き出せばいい」

言うが早いか、エリーは僕の胸に顔を埋めて、声を押し殺すようにして泣いた。

彼女の抱えるトラウマや恐怖がどれほどまでのものかは僕には理解できないけれど、それはエリーにとっては錆びついた鎖のように重

く、固いものなのだろう。

絡み付いて、ほどけずに。

幾度となく泣いて、心を痛めたのだろう。

僕には彼女を救ってあげることとはできないけれど、でも、彼女の背中を押すことはできるはずだ。

だから、今は腕のなかで泣きじゃくる愛しい少女のために、僕は彼女を愛そう。

それだけが、僕にできること。

嘘ではなくて、本物の気持ちのみで、絵本を作るようなそんな難しいことだけれど、それが今の僕のやりたいことなのだから。

修学旅行と自由な日和

季節は一番に寒さか厳しくなる二月の下旬。

さて、現在僕たちは今、修学旅行として福岡に来ている。

僕たちの学校の修学旅行はかなり特殊であり、四人一組の班ごとに別れて好きな地方へといくと言うものである。

なお、僕たちの班は、僕とエリー、小春さんに昌樹と、いつものメンバーだ。

なお、学費から積立していた旅行費用を自分達で旅行代理店の人達と相談して決めるという、かなり特殊な様式をとっていて、四人一組であるのなら他のクラスの友人などと組んでもいいことになっている。

ただし、遠くの地方へといく場合は引率の教師が同伴となり、人手のたりない場合は代理店の引率者が同行することになっている。

ちなみに僕たちは遠くの地方なので、引率者として担任の先生が行ってくれているのだけれど、放任主義と言うか、先生はホテルにてのんびりするそうだ。

一定時間おきに連絡は義務付けられたけれど、のびのびとした旅行となりそうである。

「おっきいねー。これ、駅なんだ？」

エリーが見上げる建物は、観光スポットとしても知られる博多駅であり、そのとなりには大型の施設ビルの博多シティ。

「地元じゃ考えらんねえな」

そうなのだ。

僕らが利用している駅は無人駅であり、日に走っている電車も少ないのだ。

バス自体はそこそこ通ってはいるから、大した問題ではない。

「バスもすごいなあ。次から次に入ってくる」

バスの本数を確認してみると、二分に一本のレベルだ。
ここ博多という町は、どうにもバス社会のようだ。

百円バスというものも運行していて、エリーが目を丸くしていたほどだ。

「うーん、とりあえずはお昼よね。今日はルート探索が目的だし。博多に来たなら…モツ鍋かしら？」

よくテレビのコマーシャルでも宣伝している、博多を代表する鍋のひとつだ。

醤油味と味噌味があって、たくさんのキャベツに牛モツ、そして蕨やニンニク、鷹の爪などをトッピングしてある名物鍋。

「博多なら…水炊きもいいんじゃないか？」

「私はあれは味薄くて苦手。もう少しこってりしたものがいいわ」

小春さんは濃い味噌好らしい。

水炊きは好きなのだけど、モツ鍋と同じく好き嫌いは別れるようだ。

「なら、豚骨ラーメン？」

「福岡に来たなら食べなきゃいけないけど、今じゃなくていいわね。まあ、そんなにこったものじゃなくてもいいんじゃないかしら？まだ四日あるんだし」

五泊六日という長期間に及ぶ修学旅行。

他の学校に比べたらとても長いんだけど、その前に代理店との交渉などと、やることは多岐にわたるので、しっかりと修学するという意味で、社会勉強もかねている。

「そういえば、博多ってうどん発祥の地らしいよ。たしかかるのうろんとか。泉のお母さんに聞いた」

「そういえば母さんは福岡育ちだったっけ」

「まあ、いいわ。とりあえず適当に入りましょう。昌樹、ナビだして飲食店探して」

――

それから三十分ほど町中を散策して、入った飲食店はごくごく普通のお食事処。

落ち着いた雰囲気で、あまりかしこまった雰囲気はないので、僕たちのような学生にも利用しやすい。

「はー、修学旅行できたよね？どこからきんしゃったと？」

どこからきたのかと聞かれたようだ。

この方言のイントネーションは強めなようで、気を付けて聞いていると怒っているようにも聞こえてしまう。

「埼玉からです。福岡は母が育った町だそうですから、せっかくなので来てみたんです」

「そうなん。せっかく遠いところ来たんやしね。ちよつとまつつてね」

そう言うとおかみさんは厨房の方へと引っ込むと、少ししてから小鉢を持ってきた。

どうやらサービスで小鉢を出したくれたらしい。

「これは【わけのしんのす】って言うつよ。意味は食べたなら教えちやろ」

小鉢を見やると、どうにも見慣れないものが醤油らしきもので煮詰められた料理だった。

エリーが隣で首をかしげながらも、箸を伸ばして一口。

「んー、何かこりこりしてるね。軟骨よりは柔らかいかな。小春向きかも」

「あら、ほんと。美味しいわね、これ」

美少女二人、それも片方は銀髪に碧眼の女の子が美味しそうに食べている様を見て、おかみさんは気分が良さそうに笑った。

「それね、イソギンチャクなんよ。意味はね、若者の尻の穴」

「うへえ…。まあ美味しいからいいけど…」

「美味しければ見た目も名前も関係ないわよ。おばさん、これ、あ

りがとうございます」

エリーは複雑な表情をしながらも、気に入ったのか食べ進め、小春さんはにこにこ笑みを称えながら完食していた。

「お姉ちゃんら、将来、酒飲みになるね。酒に強い男捕まえないかなよ？」

「泉…お酒強いのかな…」

「…どうかしら。従姉さんはお酒弱いし、おじさんも弱いし…」

「未成年だし…まだわかんないよ…」

「兄さんも、うまく女の尻にしかれないかん。いい夫婦はな、男が威張りくさってても、女がそれを手のひらで転がすみたい。男も、女が手綱を握ってるけん、偉そうにしてられるったいね。けど、そこには必ずお互いに感謝があるんよ。それはな、友達でも、恋人でもおんなじ。お互いがそこにおけるんが当たり前になったら、それはもう恋愛でも夫婦でもないったい。だからな、絶対に感謝だけは忘れたらいかん。銀髪の姉さんも、なんか悩み抱えてそうやけど、そんなん気にせんと。過去に何かあるんなら、過去はとついても、切り離し。縛られるのは人生の邪魔やからね。おばさんもな。長いこと姉さんたちみたいな子を見てきたんだけど、やっぱり笑ってんね」

快活に笑いながら、僕らにそんなアドバイスをくれた。

長くこの町を眺め、この町と共に過ごしてきたおかみさんは、僕たちのような若者をたくさん見てきたそうだ。

その中には人には言えない悩みを抱えた人は数多くいて、その人た

ちにはこういう話をしてきたのだろう。

そこにはとても暖かみがあつて、まるで我が子を想うような、そんな優しさが溢れていた。

「切り離す…か。難しいかも…」

「そげん深い意味やなかと。悩むときは悩めばいいと。でも、それはそのときだけにし。そやないと、のまれるよ。若いんやから、あんまり気を積めんでのんびりいきなっしやい」

そういつておかみさんから出されたのは、モツ鍋だった。

――

それからモツ鍋を食べながらおかみさんと話し込み、いつのまにやら夕方頃。

そろそろ先生が待つホテルへと帰らなければならない。

福岡の町は、とても人情に溢れる場所だと思えた。

「それじゃあ、ごちそうさまでした」

「はいはい。また、機会があればね」

頭を下げてきびすを返すと、手を振って見送ってくれるおかみさんを背にホテルへの道を歩いた。

また機会があれば。か。

でも、またきたいと思えるほどに、そこにいた時間は充実していた。わざわざ埼玉から来たかいがあつたというものだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7514y/>

嘘つき世界と二人と絵本

2011年11月27日23時01分発行